

第85回

百恵の要望で生まれた
『横須賀ストーリー』

昭和50年当時、宇崎竜童率いるダ
ウン・タウン・ブギウギ・バンドの
LP『続 脱・どん底』に聴き入っ
た時期がありました。LPに収録さ
れている曲は、和製ロックから歌謡
曲、GSを引きずったもの、ブル
ースやジャズなどさまざまな音楽が融
合、物語性を秘めた歌詞やユニーク
な発想の作品などとともに、醒めた
バラードを歌う宇崎節を楽しんだも
のでした。

昭和49年12月発売の『スモークン・
ブギ』が翌50年にかけてヒット、存
在を世に認知させた宇崎たちは、同
3月、新曲『カッコマン・ブギ』を
発売しますが、そのB面に収録され
た『港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコス
カ』のほうが大ブレイク。宇崎がド
スを効かせて啖呵を切る「アンタ、
あの娘のなんなのさ」が流行語とな
り、彼らはこの曲で年末の紅白歌合
戦に出場します。

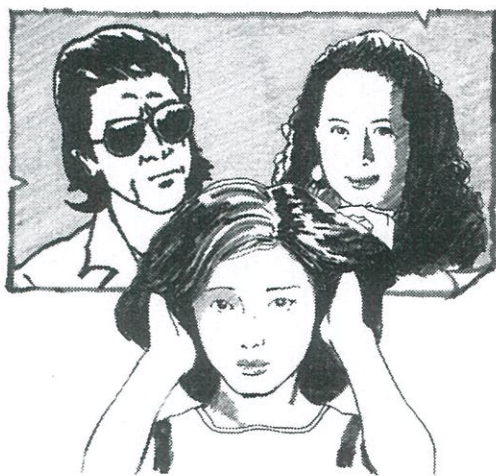
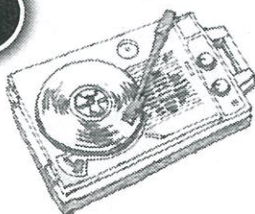
その『港のヨーコ』ですが、発
売後わずか2か月ほどで、同曲の後
日談を歌にした『帰ってきた港のヨ

ーコ』というアンサーソングが登場
します。ジャケッには「演奏・エ
コノミック・アニマルズ」と書かれ

名曲カルテ

昭和歌謡と
いつまでも

堀井六郎
絵・松本 浦



ていますが、このバンドの正体は、
発売前に『港のヨーコ』の試聴盤
を聴き、台詞を語り続けるその斬新
さに惚れ込んだホリプロ在籍の3人
の業界人でした。

『あなたのすべてを』『別れても好
きな人』の作者として知られる佐々
木勉、元モップスのドラマーだった
鈴木幹治（鈴木ヒロミツの実弟、その後、
浜田省吾のプロデューサー）、そして
ホリプロで山口百恵のレコーディン
グ・ディレクターを担当していた川
瀬泰雄の3人で、ここで川瀬と宇崎
の間に縁が生まれます。

ちょうどその頃、宇崎たちの3枚
目のLP『ブギウギ・どん底ハウス』
を聴いたのでしょうか、そこに収録
されていた宇崎の歌うバラード曲

『涙のシークレット・ラヴ』を山口
百恵がたいそう気に入っていること
を耳にした川瀬は、百恵からの要望
を聞き入れ、次のLP用の候補曲と
して阿木燿子&宇崎竜童に依頼する
ことを決断。できあがってきた2曲
のうちの1曲が『横須賀ストーリー』
でした。

デビューから3年間続いていた作
詞家・千家和也の手を離れ、大きく
舵を切ることで彼女は歴史に残る歌
手となりました。成功体験を変える
ことのリスクを怖れず、「新たな百
恵」を演出しようとする背後には、
芸能人としての「山口百恵」を客観
的に見つめる、自らの醒めた目があ
りました。実像と虚像を見事に重ね
合わせた現役生活は、歌手・女優と
いう枠を超え、演出者としての天賦
の才を感じさせるものでした。

山口百恵に対し、阿木燿子は「私」
と書かれた歌詞を「わたし」と歌う
か「あたし」と歌うか、それを演じ
分けられる読解力に感嘆、千家和也
は「利口さと慎重さを持ち合わせ、
心の中で推敲を繰り返し間違いない
と確信が持てたときに初めて行動に
移すような女性」と評し、百恵の引
退まで担当した前出の川瀬は「頼り
になる戦友」と讃えています。